

阿古智子著「日本の制度に関心を寄せる中国の人権派弁護士たち」

東亜 2010年2月号財団法人霞山会刊を読む

1. 隣国であるにもかかわらず、今回会った弁護士は誰一人として日本を訪れたことがないという。彼らは欧米諸国には頻りに招待される専門家であり、活動家である。法輪功・キリスト教信者などの弁護を担当してきた李和平は、「日本の議会や検察制度はどうなっているのか」「『菊と刀』を読んだが、今の日本人や日本文化もこの本に描かれているとおりののか」「鳩山内閣は『東アジア共同体』構想で何を実現したいのか。過去の『大東亜共栄圏』の考えとどう異なるのか」と私に矢継ぎ早に質問した。
2. 中国の法治や民主化がいっこうに進まないことに苦悩する彼らにとって、日本は「神秘的」に映る。頻りにリーダーが変わり、政権交代しても国の大勢に影響を与えないのは、日本に安定した制度・社会基盤があるからだ。そして、中国共産党が強圧的な統治構造を維持しようとするのは、そうしなければ国が崩壊するという危機感を常に抱いているからだと考える。「文化的に近い日本から中国が学ぶべきことは多いはずだ」「日本からもっと知識や技術を吸収したい」そうした思いがひしひしと伝わってきた。
3. 日本は胸をはって発信すべき多くの有形・無形の財産を有している。言論の自由、法治・市民運動の歴史、緻密な制度、文化の保存、製造業やハイテク産業における技術力、勤勉な国民性……。 「人権派」「民主活動家」といったラベルが貼られているからといって、交流を敬遠してよいのだろうか。具体的な話を聞いていると、中国政府と彼らは常に敵視し合っているわけではなく、互いに利用できる時は利用しているような側面も見え隠れする。中国の統治構造や法律・制度に精通し社会的責任感の強い彼らが、中国にとって貴重な人材であるのは確実だ。
4. 経済のグローバル化が進み、実態として国を超えた社会変容が始まっているにもかかわらず、日本人はますます内向化しているように見える。自らの立場を明確にした上で、国際社会における多様な価値観と交わっていくべきではないか。また、中国を戦略的かつ長期的な視野からとらえ、人を、制度を育てることに貢献すべきではないか。日本政府は今年度から2年間、毎年700人規模で中国の若手研究者らを招聘することを提案しているが、こうしたプロジェクトも、人類の財産を共につくるという大局的な観点に立って実施して欲しいと思う。

[コメント]

中国が日本にとって大切な存在であるなら、日本が中国にできることは何かを考え、お互いの発展のために助け合うことが大事だ。弁護士を含む専門職人材の交流はその第一歩であるかも知れない。

- 2010年1月29日 林明夫記 -